

フランスの美的教育がめざすもの ～フランス美的教育の現在～

小笠原 文

The Art Education of France —Present and Prospects—

Fumi OGASAWARA

In France, in a cabinet meeting of November 2012, the Ministry of Culture and Communication and the Ministry of National Education performed the announcement about “Art and Culture Education Plan”.

“Art and Culture Education” in the school education of France is not something new, which began in 1968.

After many reform in the 80s this subject reach the present form. However about the importance and necessity of this field similar rationalization was repeated that we have an impression it's at a standstill.

On the other hand, in the school education, this field is always “a building project” and it continues being “big will”.

“Art and Culture Education Plan” can solve this stagnation of the art education of France? This report introduces this “new” education plan enforced in 2013.

キーワード

フランス美術教育 Art Education of France, 芸術・文化教育 Artistic and Cultural Education, 芸術活動の強化 Strengthen of Artistic Activities

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Art and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

1. はじめに

—フランスにおける「芸術と文化」の民主化—

「芸術の都」と称されるパリを首都に持つフランスは、その国民誰もが芸術に親しみ、美的センスを備え、お洒落であるという実にステレオタイプな印象を持たれる傾向があるが、当然ながらそれは誤りである。むしろ芸術や文化は特権階級の所有物であり、それを広く国民に伝える、言い換えれば「教育する」ことについて、フランスの教育政策の中では長らく重要視されてこなかったことが、フランスの芸術教育の歴史を紐解くと明らかになる。

フランス革命から第三共和国にかけての教育の民主化政策の中で芸術へのアクセスの民主化は忘れ去られていて、芸術的なものが小学校の教育科目にようやく登場するのは、1880年のジュール・フェリーの教育改革を待たなければならなかった。その扱いも「デッサン・塑像・音楽」は「お裁縫（女子のみ）」科目の次の末席ポジションに申し訳程度に設けられたものであったことを付け加えておこう。1959年にアンドレ・マルローが教育相に就任した。「文化」をこよなく敬愛するマルローは国民文化政策を推進し、その中で高等教育における美術教育、すなわち「美術学校（Ecole des Beaux-Arts）」

の整備を進めたが、一方で小学校・中学校の芸術教育の改革には手を付けなかった。1968年までこの状態は続き、「音楽」と「デッサン」の授業が細々と続けられることになる。1968年、「新しい学校についての討議」がなされ、その中で「芸術教育は、現代性に目を向け、芸術家との接点を持ちながら、初等教育から開始されるべきである」とされ、「文化への深い関心と親しみを学校の中でも外でも」をスローガンに、音楽と美術を芸術・文化という文脈の上で教育する「芸術・文化教育」がようやく始動したのは1969年であった。

2. フランスの芸術教育 近年の動向

以後、「芸術・文化教育」は学校教育の中では常に「構想中のプロジェクト」であり、「大きな志」であり続けていながらも「これこそが、フランスの芸術教育であり、芸術的で文化的な国民を育てるものである」といった決定的な方策を見つけれない状態が続いた。80年代に多くの変革を経て現在に至るが、「芸術教育」の重要性や必要性については、同じような理由付けが繰り返され、行き詰まった印象さえ受ける。さらには、フランスにおいてもPISA型学力の重視傾向は例外ではなく、その影響から2008年、「芸術教育」の授業時間数が削減されたのを機に、「構想中のプロジェクト」は具体的な施策となり大きな変化が見られた。第一は「芸術史の義務化」であり、第二は「芸術活動の強化」である。さらに、2012年11月の閣議にて、フランス文化通信省とフランス教育省は共同で「芸術・文化教育構想」についての発表を行った。

この「芸術・文化教育構想」はフランスの芸術教育の停滞感を打破するものになり得るのだろうか。2008年の改革から順を追って見ていく。

3. 2008年度改革 一二つの柱

3-1. 芸術史の義務化

フランスの小学校では2008年度に、コレッジおよびリセでは2009年度より芸術史が義務化された。この義務化の目的としては「子ども達に多彩な芸術文化、文明及び宗教との出会いを経験させることで美的嗜好の多様性を認識させ、寛容な精神を育むこと」が掲げられてい

る。コレッジでは、歴史の授業の4分の1、音楽・美術の授業の半分を芸術史が構成するものとし、2010年度からは前期中等教育修了国家免状で試験科目となった。初等中等教育における芸術史履修の義務化は大きな変化であり、国際的に見ても特徴的であると言える。

2009年4月4日から授業に必要な知識等を得るための条件を整備するため、教員の国立美術館及び建造物の入館・観覧料の無料化という措置がとられている。当時の教育大臣ダルコス氏は教員が文化への理解を深めることの重要性を示し、「教員は一般の観覧者とは違い、教育者であり、文化の伝達者であること、そして子どもたちの判断力を培う役割を担っている」と述べている。この芸術史必修化については、当時「ただでさえ少ない実技活動（美術・音楽）の時間がさらに少なくなる」という危惧の声が上がった。それらに 대응するように、「芸術史は、フランス語、歴史、地理、音楽、美術、語学、また科学の分野で扱う横断的な教育で導入されることが望ましい」とされ、さらには学校内外の「芸術活動の強化」についてその方針が示された。

3-2. 芸術活動の強化

芸術活動の強化とは、主に16時以降の〈放課後補習指導〉プログラムで芸術活動を展開するもので、2008年の新学期から、指定された重点校（小学校・中学校）で試験的に開始された。専門の教員採用も増やし、将来的には200から800のクラスを目標としている。活動内容としては、音楽、造形美術、演劇など多様な分野を想定し、その活動をより充実したものにするために、地域の文化施設や、芸術作品、アーティストとの交流の機会を定期的に創出することを掲げている。

また、学校機関が、政府による文化政策の主要軸となるよう、2009年までには、すべての学校の教育課程の中に、文化施設との共同プログラムを組み込むものとされた。筆者はフランスの地方都市で造形作家として活動をしていた経歴を持つが、2009年に小学校で2回（うち1回は教員対象）、2010年に小学校と中学校（教員対象）でそれぞれ1回ずつワークショップを行っている。教員を対象としたワークショップについては、「芸術活動の強化が導入されたが、現場教員の現代美術への造詣が急に深まるものではない。現代美術へのアプローチの仕方を造

り手側から話してくれないか」という依頼内容であった。児童を対象としたワークショップは美術・造形実技の指導やサポートではなく、アーティストの世界観を児童たちに体験させるというものであった。

3-3. フランスの学校教育における芸術科目 (小学校および中学校)

2008年度改革のベースとなり、以降、その授業時間数や目的について変化なく今日に至るフランスの学校教育における芸術科目について言及したい。フランスの小学校においては、「図画工作科」と「音楽科」は分けられておらず、CP (準備課程) およびCE1 (基礎課程1年) では「芸術的な実践と芸術史」という1つの教科として扱われている。

この教科は「児童の芸術的な感受性と表現能力は、芸術実践および芸術史と結びついた文化と関わることによって発育する。」という前提に立ち、2年間の課程修了時に児童が、「①文字によって、歌によって、ダンスによって、デッサンによって、絵画によって、立体によって自己表現ができるようになる。②音楽、ダンス、舞台劇、映画、デッサン、絵画、彫刻など、芸術的な創作分野の違いがわかるようになる。③授業内に鑑賞した音楽作品や視覚芸術作品をそれと認識することができるようになる。④指揮者、映画監督、俳優、音楽家、ダンサーなど、さまざまな芸術的な職業について非常に簡単な定義づけをおこなうことができるようになる。」ことを目標としている。

CM1 (中期課程1年) CM2 (中期課程2年) になると、この教科は「人間教育」という科目の一つとして行われ、その就学目標はさらに幅を広げ、多分野に渡る。このようなカリキュラム編成を見ると、フランスにおいては、児童が「人間」が築いてきた「創造的なもの」「文化

学 年	科 目 名	授 業 時 間 数
CP/CE1	芸術的な実践 と芸術史	週9時間 年間81時間
CE2/CM1/CM2	人間教育	週11時間 年間78時間
Collège	芸術科目 ・造形美術 ・音楽	週1時間 週1時間

図1：小学校・中学校における芸術科目と授業時間数

的なもの」の価値を知り、それを愛する心を育てるための「手がかりのひとつ」として図画工作・美術科が音楽科などと並列して位置づけられていることがわかる。

中学校においては、「音楽・造形美術」という科目となる。この科目の目標は「芸術に留意・注目する力を育成し、芸術的な活動を実践する。生徒は芸術作品を分析することによって、芸術の種類や様式、時代の多様性を発見する。それらを通し、自分自身の表現や想像の嗜好を培い、さらには、音楽、造形美術、建築、視覚芸術の創作について理解する手掛かりを得る」とされている。

4. 連携授業・ワークショップ —実践例—

4-1. 初等教育の柔軟性

特に初等教育において、科目数も少なく、国語と算数以外の科目についての週授業時間が比較的自由に設定できることから、複数の科目で一つのテーマを掘り下げることが可能なフランスの教育機関¹においては、「芸術活動の強化」以前から、学外の専門家や専門施設との連携授業やワークショップを行う学校は少なくなかった。発表者が参画した「サン・フロン・プロジェクト」(2006~2007)もその一例であり、このプロジェクトではフランス語、芸術実技・芸術史、世界の発見という3つの教科を縦断して「触れる絵本」を制作するという活動を1年間かけて行った。また、芸術活動の強化導入にあたっての重点施設の一つである国際先史時代センターは2008年の新学期を待つまでもなく、既に多くのプロジェクトを始動させた。その例を以下に挙げる。

教科・科目	年間授業数	週授業時間
フ ラ ン ス 語	360時間	10時間
算 数	180時間	5時間
体 育	108時間	9時間☆
外 国 語	54時間	9時間☆
芸術実技・芸術史	81時間	9時間☆
世 界 の 発 見	81時間	9時間☆
合 計	864時間	24時間

図2：小学校(1・2年)科目&授業時間数、☆は9時間の中で自由に組み合わせることができる。

4-2. 「先史時代の日」

【場所・対象児】サン・ピエール・デイロー小学校，準備課程（CP）基礎課程1年（CE1）【内容】2007年9月から2008年の6月の1年間，児童たちは，主に「フランス語（国語）」「芸術」「世界の発見」の3科目の時間を利用して「旧石器時代」について多角的に学び，その集大成として，旧石器時代人の手仕事を一通り体験する「旧石器時代の日」を行った。このプログラムには，絵本作家，考古学者が専門家として参画した。



図3：火打石で割り箸に穴を開けて，針を作る児童（サン・ピエール・デイロー小学校）



図4：木と葉を使って住居を作る児童（サン・ピエール・デイロー小学校）

4-3. 「マンモス特急プロジェクト」

【場所・対象児】ドルドーニュ県南西部の4つの小学校（ジュール・フェリー小学校，サンシプリアン小学校，メイラル小学校，レゼイジー・ド・タヤック小学校）合同行事。基礎課程1年（CE1）基礎課程2年（CE2）【内容】ボルドー市の科学館（Cap Science）で開催された「マンモスとその時代」展を見学するプログラムであるが，特徴的なのは，片道約2時間の列車の中での学習に重点を置き，考古学者や

芸術家を招聘し，列車内で多くの活動を行った。



図5：マンモスの歯の化石を説明する考古学者（マンモス特急プロジェクト）



図6：フィンガーペイントで壁画を描く児童（マンモス特急プロジェクト）

その萌芽的な実践例の一部を紹介したが，この教育政策について考察すると，その成果については論議の余地がある。特に指摘されるのは根強い社会問題から来る地域格差がこの「芸術活動の強化」にも大きく影響を及ぼすことや，内容の伴わない芸術活動が多く行われていること，教員個人の力量による学習内容の格差，さらには単発的で連続性がなく，学修につながらないなどが挙げられる。

5. 2013年度改革「芸術・文化教育構想」

「芸術活動の強化」を受け，それを推進した形で提出されたものが，2012年11月の閣議で，フランス文化通信省とフランス教育省が共同で発表を行った「芸術・文化教育構想」である。文化通信大臣のオレリー・フィリペティはこの発表を以下のような言葉で開始している。「今日，私たちは共に芸術教育の国家政策の分野において，新しい段階へと進みます…」

この「芸術・文化教育」は、すべての子どもたちが幼児・児童・生徒という学校教育期間において、①豊かで一貫性を持った「ぼくの・わたしの文化」を構築していくこと。②芸術的な実践を深化させること。③芸術家や芸術作品と出会い、文化的な場に慣れ親しむことを実現させることを目的としている。前述した通り、この「芸術・文化教育構想」は2008年の「芸術活動の強化」に端を発するが、加えて、2012年7月にその協議が開始された「学校の再構築」とも関連性を持つ。

この「学校の再構築」では、「知的好奇心の発達に寄与するスポーツ、文化・芸術活動等の課外活動の充実させるため、地方公共団体との協力を図る」としている。さらに、学校の生活リズムの向上についての審議がなされ、2014年新学期（9月）より、従来の週4日制に代わって、週4日半制が施行されることになった。その結果、補足的な教育活動および課外活動の時間がより多めに、より規則正しく配置される授業時間となった。

上記3-3.で初等中等教育における芸術科目の目標について述べたが、これらは2013年の「芸術・文化教育構想」にあたって、変更は一切なされていない。また、授業時間数も2008年から増減は見られない。つまり、2013年の「芸術・文化教育」の導入は芸術科目の従来の修学目標に児童・生徒を近づけるためのダイナミックな方法として提示されたものであろう。そしてそれは、①複数科目を横断的に導入 ②学校外での文化施設との連携 ③補足的な教育活動ⁱⁱおよび課外活動時間ⁱⁱⁱの活用、という方法で行われ、芸術科目としての授業に時間も内容も収まりきらないことを前提としている。

6. 芸術・文化教育のめざすもの

—幼稚園からバカロレアまで—

これらを見ると、フランス政府の意図する「芸術・文化教育」は「学外から芸術家を招聘して一回きりのワークショップを行う」という受動的なものに留まらず、専門家と教員、そして学外施設との協力のもと遂行される、連続性を持つものであり、内容も「芸術・文化の模擬体験」的な従来の授業とは異なるものを目指していると考えられる。そこには「子どもの美的体験」の重要性に着目し、その「体験」について、文化・芸術の創造者である芸術家が深く関

わりを持つことで、「創造の追体験」を実感させ、より本質に近づけようという試みが見られる。さらにその「体験」については「内的体験」としての体験を意味している。

数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーを問うPISA型学力の重視から授業時間数が削減され、それを契機に内容について大幅な改革が行われたフランスの芸術科目であるが、PISA型学力の目指す力は、「知識・技能を活用して思考し、表現する力」とされており、芸術科目はその力を育成する多大な可能性を持つ。多くの国が、芸術科目の目標にこの「知識・技能を活用して思考し、表現する力」の育成を意識し、その具体的な指導方法や活動内容を模索しており、わが国も例外ではない。フランス政府が2013年より導入した芸術文化教育構想は児童・生徒たちにこの力を獲得させる活動となりうるのだろうか。今後の展開が注目される。

活動例（CE1 基礎過程1年：日本の小学校2年生に相当）「街探検 一見方を変えて—」
分野：文化遺産・建築・視覚美術・文学
活動の流れ：①施設周辺探検（交通、起源、建物の形と機能、住居者と使用者）②一つの構築物もしくはひとつの注目すべき場所に関する徹底的な解明（広場、教会、伝統的な建造物、近代・現代的な建物）③痕跡の収集、フロッタージュ（擦り出し）、デッサン、写真、パンフレットなど④学校での展覧会（作品、模型、写真、発見した場所についてのレポート、伝説などの作文）⑤実在あるいは想像の場所・モニュメントに関する口頭表現。子ども達の「あったらいいな」⑥グループ活動。場所・モニュメントの「あったらいいな」を形に表す造形活動。
協力者・講師：建築家、文化遺産学芸員、造形作家もしくは写真家

図7：フランス教育庁発行の「芸術・文化教育ガイド」に示された活動例（P38）

参考・引用文献

education.gouv.fr フランス教育庁 HP（2014）
Guide pour la mise en oeuvre du parcours d'éducation artistique et culturelle, ministere education nationale, 2013

i 図2を参照

ii APC activité pédagogiques complémentaires 補足的な教育活動

iii TAP temps d'activités periscolaires 課外活動時間